

研究大学強化促進事業に関する意見書の取りまとめ

A:優れている

B:良好である

C:不十分である

1. RU事業(平成 25 年度～29 年度)の活動について

評価内容	評価	評価者氏名	コメント
(1) 計画に沿った活動状況であるかについて	A	評価者：A	全体目的（5年でランキング150位内）を達成している。 当初計画に沿った活動をほぼ実現したのみならず、新たな改革にも意欲的にとりくんでいる。
	A	評価者：B	系統だった体制のもとで活発な活動を行っている。 TMDU ならではの取り組みも多く高く評価できる。
	A	評価者：C	29年度から新たに組み込まれている部分も含めて excellent な活動状況である。
	A	評価者：D	計画におおむね沿っており、設定事項について反映された活動内容となっている。
	A	評価者：E	専門業務型裁量労働制度の導入、任期制の導入と適切な運用、テニユアトラック制度の導入など研究効率を高める取り組みをしている点は高く評価出来る。
	A	評価者：F	計画通り制度改革を実施している。
(2) 事業活動の進捗状況について (全般的評価)	A	評価者：A	全体目的（5年でランキング150位内）を達成。 個別活動も増加傾向。 欲を言えば、個々の活動の目標達成が全体目的の達成にどのように効果がある（だからこの活動をこれだけがんばる）といえるとよい。 個別には広報と国際共著論文の更なる改善を期待
	A	評価者：B	全般的には順調に進捗している。若い研究者を年俸制の助教で雇用するなどの取組は評価できる。一方で歯学系の（女性）研究者をもっと育成できないかが課題
	A	評価者：C	女性上位職、外国人教員の取り組みについてはやや遅れた感はあるが、概ね順調と思う。
	A	評価者：D	非常に積極的に次々と新たな取組みが打ち出されていることを評価したい。ただ、これらが成功するかについてはこれから注視を要する。
	A	評価者：E	研究費獲得ブランチ、先進医療展開ブランチ、研究力強化ブランチが相乗的に成果をあげているようである。
	A	評価者：F	当初の計画を1年前倒しで進めており意欲的な活動を展開している。

(3) 評価(外部評価・自己評価)に基づいた改善がなされているかについて	A	評価者：A	評価時の指摘もふまえなぜこの改善が必要かという迄もよく自己分析されている。
	A	評価者：B	指摘された事項に適切に対応している。
	A	評価者：C	自己評価も含めて適格にとらえて改善にむけて努力されている。
	A	評価者：D	評価を受けた改善が各項目について丁寧になされている。
	A	評価者：E	PDCA サイクルが教育・研究のいずれにおいても導入されており、これが上手く work している。
	A	評価者：F	外部評価・自己評価に基づいて改善がなされている。

2. URAについて

評価	評価者氏名	コメント
A	評価者：A	組成改革に応じ 3 つの機能にわけて集中していた URA 機能がイノベーション推進本部でさらに融合連携したり、医療系 URA のキャリアパスを考えたりと、優れた発展をみせている。
A	評価者：B	研究のサポートという点でよく機能している。他大学にとってもよいモデルとなるので高く評価したい。
A	評価者：C	実にうまく機能している。
B	評価者：D	新しい取り組みとして評価でき、その機能も十分認められる。ただし、さらなる活用と、より目的に沿った人員構成が望ましい。
A	評価者：E	1(2)でも述べたが、3 つのブランチが戦略的によく work している。また URA の評価が①研究者の研究活動活性化、②産学連携活性化③URA スキルアップなどによって評価されている点は素晴らしい。
A	評価者：F	URA の人員の最適化、組織再編を行い、全学の様々な施策の中にブランチを設け大学改革を支えている。

3. URAの活動について

評価内容	評価	評価者氏名	コメント
(1)大型研究展開 ブランチ(研究費 獲得ブランチ)の 活動・実績につ いて	A	評価者：A	大型の共同受託研究が数億単位でふえている。 さらなる拡大を期待
	A	評価者：B	AMEDの研究費の獲得がふえているとのことであるが、それ程、外からは見えてこない感もある。 創芽に関する支援などを強化してはどうか。
	A	評価者：C	
	B	評価者：D	一定の実績を上げていると認められる。現在のライフサイエンス界への注目度の高まりを考えると、さらに加速度的に実績を上げることが求められる。
	A	評価者：E	科研費採択件数、研究費獲得額いずれも H25 年→28 年にかけて順調に増加している。
	A	評価者：F	民間企業との研究費、技術移転・特許権収入、科研費採択件数、その他の研実費などが増えており効果的に機能している。
(2)研究強化ブ ランチの活動・実績 について	B	評価者：A	0 から全体の基盤をよく押し上げている。 国際共著論文数をもっとのばすことを期待して、あえて B とした。
	A	評価者：B	創生医学コンソーシアムの開始など、新しい領域にチャレンジしており、高く評価できる。
	A	評価者：C	29 年度からの新しい取り組みに期待します。
	B	評価者：D	機能的に活動していることが認められる。
	A	評価者：E	包括連携協定、大学発ベンチャー設立、ジョイントリサーチ講座などいずれも順調に伸びている。
	A	評価者：F	包括連携、大学発ベンチャー、ジョイントリサーチその他の指標が増加しており活動の成果が得られている。
(3)先進医療展開 ブランチの活動・ 実績について	A	評価者：A	TMDU の URA 活動の特徴としてよく機能している
	A	評価者：B	さまざまなバックグラウンドの教員をリクルートして体制を作った点は高く評価する。
	A	評価者：C	
	A	評価者：D	堅調に実績が推移しているのでさらに医療系 URA の強化を経て期待される。

	A	評価者：E	主施設として医師主導治験実施も H25→28 年にかけて劇的に増加している。
	A	評価者：F	PMDA 面談、助言、実用化支援などの指標が増えており活動の成果が得られている。

4. 広報活動について

評価	評価者氏名	コメント
B	評価者：A	アクションとしては Nature Index の活用、ブランド構成の強化などよくやっている。活動の善し悪しをモニターする指標を設立されるとさらによいと思ひあえて B
A	評価者：B	大学の知名度をあげるのに貢献していると思われる
A	評価者：C	国際的な広報活動も含めて更に展開して欲しい
B	評価者：D	以前から比べれば格段の進歩した取組みであるといえるが、現実にはまだまだ 100%の結果がでていないように思われるので通り一偏のものではなく、さらに工夫した取組を期待したい。
A	評価者：E	Nature Index2018Japan での情報発信など積極的に取り組んでいる。
A	評価者：F	

5. 研究者情報・IRについて

評価	評価者氏名	コメント
B	評価者：A	IR 機能を強化する URA 機能の配置など、体制は良い。 具体的にどう IR が改善されたかが知りたい
A	評価者：B	
A	評価者：C	

B	評価者：D	さらに各界への認知度を高める方法を検討いただきたい。
A	評価者：E	研究、教育、医療、人事、財務に IR を設け機能強化している点は素晴らしい。
A	評価者：F	

6. その他、お気づきの点

評価者氏名	コメント
評価者：A	<p>全体目標（10年で医学系100位以内）に向け、中間的目標の「5年で150位」を順調にクリアしている。若干アクションが多すぎるので、重要活動についての個別目標など、カギとなる部分をわかりやすくアピールするとよい。</p> <p>更なる向上には、認知度の向上が大事、次世代研究者の育成をぜひ国際的にも進む形ですすめ、国際ネットワークを強化すること、学内アンケートなどしつつ、国際共著論文活動を高める方向に推奨することなど期待。</p> <p>URAへの学内認知度もぜひモニターしてほしい。</p> <p>医療系URAのキャリアパスを含めた確立、年報制+教育評価システムなど優れた学内改革状況をさらにアピールして、他学の参考になるようにしてほしい。</p> <p>URA制度の自立化研究力向上につながる学長裁量経費の拡充のため、産学連携の収入目標などきびしいハードルになるが頑張って設定の達成してほしい。</p>
評価者：B	全体的に極めて順調に進んでいると思われる。
評価者：C	<p>TOP10(あるいは20%位まで)の教員の更なる発展には十分な取り組みが行われているが、残りの60%程度の(bottom20-30%はどう仕様もないと思う)底上げへの取り組み。</p> <p>医歯学総合研究科としての資料はあるが、歯だけの資料(例えば科研費取得など)をまとめて歯の教員に知らせるべき</p>
評価者：D	<p>前向きに新たな組織等の立ち上げ、改編を行っておられ、その姿勢は大いに評価したい。</p> <p>ただ、やや組織体の体率が大学の規模に比べて複雑なようにも見えるのである程度の整理が可能か検討されてもいいように思われる。</p> <p>またURAをより中心的に、効率性を高めるための機能として強化されたい。</p>
評価者：E	次世代育成、女性研究者、Top研究者育成など attractive な取り組みをしている。
評価者：F	<ul style="list-style-type: none"> ・今後の活動に期待します。 ・欧米の最先端研究機関との組織対組織の連携の検討 ・欧米の外国人研究者の定着する方策